

「佛隴道人の碑」について

整理番号	浦和〇九	題額	佛隴道人碑文	題額揮毫	文思龍淵	碑記撰文	文思龍淵	碑記揮毫	文思龍淵
------	------	----	--------	------	------	------	------	------	------

鐫刻	—	撰文建碑年	一八四四・天保一五	住所	緑区中尾	場所	吉祥寺	備考	
----	---	-------	-----------	----	------	----	-----	----	--

一. はじめに

本石碑は、吉祥寺住をつとめたことがある靈如仏隴について、その事跡と徳を称えるために立てられたものである。碑文については、大島進『尾間木の石づみ（修訂版）』（以後「大島」）に訳注があり、今回の訳注作成にあつて参照させていただいた。

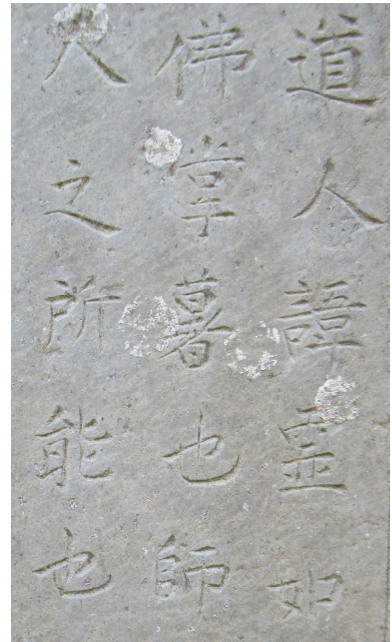
○写真1 石碑正面



○写真2 篆額



○写真3 「碑記」部分



二. 翻刻並に訳注

■翻刻

◎題額 (篆書体)

▲▲▲  
佛 衛 碑  
隨 人 文

◎碑記（楷書体、□は空格）

道人諱靈如號佛隨俗姓利根川本州比企郡南園部人也生有奇相頭面若佛掌薯也師弱冠而夙有奉佛之志遂投于蘭若薙染爲僧然而命之厚薄非人之所能也師初貧窶冬來無寢衣聚藁於房纏身而蠲寒數數也文化中掛藉乎台嶺之學舍莫充其費之財也於是托身於同州柳寄觀音小院緣務貨殖數年以償之也性又非英才唯責已勵志勉疆不止螢光雪燭之功加文墨之道稍進焉文政中稟□東叡大王之令擢躋于伴棟之階領徒衆循循然誘之迨其職滿業亦卒焉依命距同郡吉祥教寺主之蓋有年矣頻前賜朱衣白帽天保中轉錫乎常州中郡月山寺不季留鉢於此地云凡師之所屆咸能協和四方慕其德風者復夥矣師觀察諷經之餘傍能詩偈篇章既行于世然常多病而發作有時藥餌更靡懈矣一夏漸迫一軀成病器自慮其死期將至犯病拂衣俄然起身眷弟子而口授於終焉之詩云□山蒼不改舊時色□溪水誤看作斬新□即是泥沙銀境畧□本來艸樹金仙人□七言一章賦已面西瞑目稱佛名晏如夫化矣時春穉四十又九實天保庚子年孟夏之二十九日也嗚惜哉銘曰 人世兮幾時 倏兮如泡焰 當處兮萃起 隨處兮消殲 天性兮周旋 寥裏兮擾恬 師逝兮安在 勤詩兮從欣 想送兮真面 髣髴兮還現 非如兮非異 世兮盍足慰

天保十五甲辰之杪冬令旦 南總芝山前往幻成逸人撰書◆◆◆◆◆

・▲◆◇は、篆印を刻したものだ。

・▲の一字目は「克」、二字目は「己」で、「篆書字体データベース」の「韻府古篆彙選」に類似形がある。三字目は「復」、四字目は「禮」で、同「偏類六書通」に類似形がある。四文字で「克己復禮」。<sup>1)</sup>

・◆の一字目は「龍」、二字目は「淵」で、同「偏類六書通」に類似形があり、三字目は「之」、四字目は「印」で、同「印篆貫珠」に類似形がある。四文字で「龍淵之印」。

・◇の一字目は「民」、二字目は「如」で、同「偏類六書通」に類似形があり、三字目は「堂」で、同「印篆貫珠」に類似形がある。三文字で「民如堂」。<sup>2)</sup>

●異体字など

- |    |    |    |    |    |    |
|----|----|----|----|----|----|
| ○隴 | ○衢 | ○號 | ○焉 | ○充 | ○有 |
| ○前 | ○夢 | ○夏 | ○柳 | ○隨 | ○處 |
| ○面 | ○花 | ○裏 | ○多 | ○畧 | ○凡 |
| ○看 | ○勤 |    |    |    |    |

■ 訳注

● 本文 □は空格（いわゆる旧字体とし、一行毎に改行した）

◎ 題字

「克己復禮」

佛隴道人碑文

◎ 碑記

道人、諱靈如、號佛隴、俗姓利根川。本州比企郡南園部人也。生有奇相、頭面若佛掌薯也。

師弱冠、而夙有奉佛之志。

遂投于蘭若、薙染爲僧。

然而命之厚薄、非人之所能也。

師初貧窶。冬來無寢衣、聚藁於房、纏身而緇寒、數數也。

文化中、掛藉乎台嶺之學舍、莫充其費之財也。

於是托身於同州柳崎觀音小院、緣務貨殖數年以償之也。

性又非英才、唯責已勵志、勉疆不止、螢光雪燭之功。

加文墨之道稍進焉。

文政中、稟□東叡大王之令、擢躋于伴棟之階、領徒衆循循然誘之、迨其職滿業亦卒焉。

依命距同郡吉祥教寺主之蓋有年矣。頻前賜朱衣白帽。

天保中、轉錫乎常州中郡月山寺。不季、留鉢於此地云。

凡師之所屆、咸能協和四方、慕其德風者復多矣。

師觀察諷經之餘、傍能詩偈、篇章既行于世。

然常多病、而發作有時、藥餌更靡懈矣。

一夏漸迫、一軀成病器。自慮其死期、將至犯病拂衣、俄然起身、眷弟子而口授於終焉之。

詩云、

山花不改舊時色

溪水誤看作斬新

即是泥沙銀境界

本來草樹金仙人

七言一章賦已、面西瞑目、稱佛名晏如夫化矣。

時春秋四十又九。

實天保庚子年、孟夏之二十九日也。

嗚惜哉。

銘曰、

人世兮幾時、倏兮如泡焰。

當處兮萃起、隨處兮消殲。

天性兮周旋、夢裏兮擾恬。

師逝兮安在、勤詩兮從炊。

想送兮真面、髣髴兮還現。  
非如今非異、世兮盍足厭。

天保十五甲辰之杪冬令旦  
南總芝山前住幻成逸人撰書「龍淵之印」「民如堂」

### ●訓記

道人、諱は靈如、號は佛隴、俗姓は利根川。本州比企郡南園部の人なり。  
生、奇相有り。頭面は佛掌薯の若きなり。  
師、弱冠にして、夙に佛を奉ずるの志有り。  
遂に蘭らん若にやに投じ、薙染ちぜんして僧となる。  
然して命の厚薄は、人の能くする所に非ざるなり。  
師初め貧窶なり。冬來るに寝衣無く、藁を房に聚め、身に纏ひて寒を蠲のぞくこと、數數なり。  
文化中、藉を台嶺の學舎に掛くも、其費に充つるの財莫し。  
是において、身を同州柳崎觀音小院に托し、貨殖に務むること數年なるに縁りて、以て之を償つぐなふ。

性又た英才に非ず、唯だ己を責め志を勵し、勉疆して止まず、螢光雪燭の功あり。  
加ふるに文墨の道稍々進む。  
文政中、東叡大王の令を稟うけ、伴棟の階領に擢躋さる。  
徒衆循循然として之を誘ふ。

其の職の滿つるに迫およびて、業も亦た卒ふ。  
命に依り、同郡の吉祥教寺に距いたり、之に主たること蓋し有年なり。  
頻りに、前に、朱衣白帽を賜はる。

天保中、錫を常州中郡月山寺に轉じ、季ならずして、鉢を此の地に留むと云ふ。  
凡そ師の屈いたる所、咸な能く四方を協和し、其の徳風を慕ふ者復た多し。  
師、觀察諷ふきよう經の餘、傍ら能く詩偈し、篇章既に世に行はる。

然れども常に多病にして、發作有時にして、藥餌更に懈る靡し。  
一夏漸く迫り、一軀病器を成す。

自ら其の死期を慮んばかり、將に病を犯して衣を拂ひ、俄然として身を起こし、弟子を眷かへりみて、終焉の詩を口授するに至らんとす。  
云ふ、

山花は舊時の色を改めざるに

溪水は誤り看て斬新と作す

即ち是れ泥沙銀の境ききようが界がいにして

本來、草樹は金仙人なり

七言一章賦しおほ巳り、西に面して瞑目し、佛名を稱し、晏如として夫れ化せり。  
時に春秋四十又九。

實に天保庚子の年、孟夏の二十九日なり。

鳴、惜しいかな。

銘に曰く、

人世幾時ぞ、倏として泡焰の如し。  
當處に萃起しては、隨處に消殲す。

天性周旋にして、夢裏に擾怙たり。

師逝けり、安くにか在る、詩に勤めて忤に従はん。

真面を想ひ送れば、髣髴として還り現はる。

如に非ず、異に非ず、世は盍ぞ慼らぐに足らざらん。

天保十五甲辰の杪冬令旦

南總芝山前住幻成逸人撰し書す「龍淵之印」〔民如堂〕

### ●人物

○東叡大王 江戸時代、東叡山寛永寺貫首は日光輪王寺宮を兼務した。漢文風に「東叡大王」と称した。文政年間は、第十代有栖川宮織仁親王。

○南總芝山前住幻成逸人 法諱は龍淵、道号は文思、号が幻成逸人。生没年不詳。文化八（一八一）年刊の「東叡山勸学講院了翁碑文註」と、天保三（一八三二）年自序の「般若心経夢性解」という著述が残る。後者には「寓于武陽五臺山幻成逸人謹撰」とあり、武蔵国五台山源空寺（現、台東区東上野）に仮寓していたという。「南總芝山」は、現在の千葉県芝山町で、現在でもその地にある「芝山仁王尊 観音教寺」を指すと思われる。

### ●注

○克己復禮 『論語』顔淵篇に「子曰、克己復禮爲仁（先生がおっしゃった「わが身をつつしんで礼の規範にたちもどるのが仁ということだ）」とある。儒家の修身の教えの第一歩といえる。龍淵は仏者であるが、この言葉を座右の銘としていたようで、彼の著書「般若心経夢性解」にも「克己復禮」の印が捺されている。またこの印が篆額の横に記されていることは、篆額を書いたのが龍淵であることを示しているよう。

○本州 武蔵の国。

○比企郡南園部 現在、川島町大字南園部。

○佛掌薯 つくねいも。大和芋とも。山芋の一種で、ごつごつとしていて拳骨のような形をしている。

○弱冠 二十歳。あるいは、年若いとき。

○蘭若 阿蘭若 (aranya の音写) の略。森林の意味で、比丘が森林に住んだことから、のちに寺院の意味で用いられた。

○薙染 薙はそる。剃に通じる。髪を剃る、僧侶になること。染は染めるだが、染服は、墨染めの衣、僧衣。薙染で、出家すること。

○命 命運。

- 厚薄 大小。
- 貧窶 貧乏、貧窮。
- 錫 除く。
- 數數 たびたび。
- 文化中 一八〇四〜一八一八年。
- 台嶺 比叡山。
- 托身 身をよせる。
- 同州柳崎 現川口市大字柳崎。
- 觀音小院 現觀音院。大慈山東光寺。「新編武蔵風土記稿」に「天台宗、中尾村吉祥寺末」とある。
- 務 従事する。
- 貨殖 貨殖は、商売、あきない。物を売る商売を行ったというよりは、吉祥寺の末寺の觀音小院において、雇われ住持となり、給料や謝金（お布施）をもらったのではないか。
- 償 補填する。延暦寺の学舎での授業料に充てるということだろう。
- 英才 すぐれた才能。
- 責己 己は己。熟語は無いが、己に厳しく、妥協や情弱を許さなかったことを言うのだろう。
- 勵志 心を集中して努める。
- 勉強 力を尽くしてつとめる。精を出す。
- 螢光雪燭之功 螢雪の功。苦学して学問に励むこと。
- 文墨 文章を書くこと。
- 文政中 一八一八〜一八三〇年。
- 稟 上からの命令を受ける。
- 擢躋 拔擢。
- 伴棟 熟語は無いが、伴僧は、修行などの仏事儀礼のみに、導師に伴う僧侶。大島は「伴僧の学寮、導師に付き従う僧たちの学寮」と解する。いまこれに従う。
- 階領 熟語は無いが、大島は「統率者」と解する。「階」が学寮における単位で、「領」が領事、すなわち統率するもの、か。いま大島に従う。
- 徒衆 弟子衆。門下のものども。
- 循循然誘之 循循は順序正しい、また決まりを守るさま。『論語』子罕篇に「夫子循循然善誘人（うちの先生は、順序よく巧みに人を導く）」とある。仏隴道人が、弟子衆を、順序よく巧みに導いた、というのであろう。
- 業 学業。
- 距 達する、至る。
- 主 あるじ、住職となる。
- 蓋 おおよそ。
- 有年 多年。
- 頻前賜 不詳。頻は、頻繁に。前は、時間、機会としての「前」か。しかるべき儀式に先立って朱衣と白帽を賜る、ということか。

- 朱衣白帽 大島は「天台宗で朱色の衣と白色の頭巾を許される」と解する。いまこれに従う。
- 天保中 一八三〇〜一八四四年。
- 轉錫 錫杖は僧侶が歩行するときの持ち物。転居する。
- 常州中郡 常磐国那珂郡。
- 月山寺 現天台宗、曙光山見明星悟道院月山寺。江戸時代は関東八檀林のひとつ。現桜川市にある。
- 不季 季は、四季のひとつ。三ヶ月。短期間ということだろう。
- 留鉢 鉢は僧侶が托鉢するときの持ち物。そこに落ち着く、留まること。
- 此地 文脈上は月山寺かもしれないが、ここでは吉祥寺と取る。月山寺に転居したが、短期間で吉祥寺に戻ってきて、そこに最後までいた、と解した。
- 協和 心を合わせて仲良くする。『尚書』堯典に「協和萬邦（全ての国が仲良くなるようになる）」とある。
- 四方 天下、周囲の国々。ここでは、師の周囲の人びと、だろう。
- 徳風 君子の為政の徳。『論語』顔淵篇に「君子之徳、風也。小人之徳、草也。草、上之風、必偃（君子の持ち前は、いわば風である。小人（民）の持ち前は、いわば草である。草が風に吹かれれば、必ずそれになびいて伏せる。民は君子に従うものであるということ）」とある。ここでは、師の徳が弟子や信者に及んで影響を与えることを言うのだろう。
- 觀察 よく熟思、考察すること。
- 諷經 声をあげて経文を諷誦ふじゆすること。
- 餘 余暇。
- 傍 本職の他。
- 偈 梵語 *gatha* の音訳「偈陀」の略。漢語の「頌」にあたり、仏典の中の仏徳を称える韻文。ここでは詩偈と熟語化しており、韻文、漢詩を指すだろう。
- 篇章 文章の篇や章。また書物。ここでは、師の手になる漢文の詩文だろう。
- 發作 おこり、マラリヤか。
- 有時 時々。
- 藥餌 薬になるたべもの。
- 靡懈 靡は、無し。懈は、行わない。常に手放せなかった、の意だろう。
- 一軀 からだ全体。
- 病器 熟語は無いが、病が入った器で、病身をいうのだろう。
- 拂衣 着物を払う、奮い立つ。
- 俄然 にわかに、突然。
- 終焉之詩 終焉は、国語では、死ぬこと、臨終。和歌であれば、辞世の歌や句であろうが、漢詩を得意とする師は、辞世の詩を作った。
- 山花 山や花といった自然。
- 不改舊時色 今も昔と変わらない姿をしていること。
- 斬新 全く新しいさま。
- 泥沙銀 不詳だが、「金を泥に捨てる」と同義か。私欲を捨てさること。



- 境界 境地。
- 本来 もともと。
- 金仙 仏陀。金人は、仏。
- 七言一章 七言四句の詩。押韻は、二句末「新」と四句末「人」で、上平十一真。初句末が押韻していないが、四句で絶句とみてよいであろう。
- 賦 詩を作る、吟じる。
- 已 已に通じる。ヤム、完全におわる、しとげる。
- 晏如 落ち着いているさま。
- 化 遷化。高僧が死ぬこと。
- 天保庚子年 十一(一八四〇)年。
- 孟夏 四月。
- 倏 すみやかなさま。
- 當處 此処。こゝ。
- 萃 集まる。
- 隨處 いたるところ。あるいはあちこち。
- 殲 尽きる。
- 天性 生まれつき具わっている素質。
- 周旋 世話をする、救う。
- 夢裏 夢の中。
- 擾恬 熟語は無いが、擾は、やすんずる。恬は、静か、平静なさま。
- 勤詩 詩作にはげむことか。
- 欣 望む、好む、願う。
- 想送 思いやる。
- 真面 真面目。ありのままの姿。
- 髻髻 ほとんど、あるいはぼんやりとしたさま。
- 還現 還り現れる。
- 非如 不詳だが、似ているわけではない、うつつのものではない、くらいか。
- 非異 不詳だが、はっきりと違うわけではない、くらいか。前句とあわせて、ぼんやりと思いつきされてきた仏陀道人のお姿は、うつつの姿に似ているわけではない、かといって全く違うわけでもない。つまり、あの世に行かれた道人とは、現実には再び会えないが、私の心の中にはぼんやりとだがいらっしやっております、決して遠い存在になつてしまつたわけではない。だから、道人の逝去を悲しみ、人世が短いことを嘆く必要は無く、安らぎを得ればよい、という意味に解した。
- 盍 何不の音通。なんぞくざらん。
- 慳 やすらぐ。
- 杪冬 十二月。
- 令旦 縁起のよい日、吉日。
- 龍淵之印 龍淵は、幻成逸人の法諱。
- 民如堂 龍淵の号のひとつであろう。「民如」は、「視民如傷」に基づくものと思われる。

この言葉は、『孟子』離婁下二十一章「文王視民如傷、望道而未之見（周の文王は病人をあわれむように民をよくいたわり、正しい道を仰ぎ望むことはまだ見ぬものをあこがれ慕うように熱心であった）」に見える。宋の程明道について「明堂先生作縣、凡座處皆書『視民如傷』四字（明道先生が県令になると、その座するところにはみな「視民如傷」の「孟子」の言葉を張りだし、己のいましめとするのだった）」（『近思錄』政事類五十六）の故事がある。君主や政治家が人民を慈愛することだが、龍淵は仏者なので、仏や出家者が衆生に慈愛の心で接して導くことを言うのだろう。なお「視民如傷」は、『春秋左氏伝』哀公元年条にも見える。

●口語訳（章立てと小見出しは訳者が便宜的につけた）

【仏隴道人の生い立ちと容貌】

仏隴道人、法諱は靈如、道号は仏隴で、俗姓は利根川氏である。武蔵の国比企郡南園部の人である。

生まれながらに奇相で、その頭部は、ごつごつした大和芋のようだった（容姿端麗ではなかったことを言う）。

【道人の出家】

師は、年若いときから、はやくも仏を奉ずる志を抱いていた。

そこでついに寺院に赴き、髪を剃って僧侶となった。

【若いころの貧窮ぶり】

しかし、人の命運の厚薄は、その人の努力などで、どうにかできるものではない場合がある。

師は、もともと貧乏で、冬になると夜具が無く、藁を僧坊に集めてそれを身にまとい、寒さを防ぐということが、しばしばであった。

【延暦寺の学舎留学のためのアルバイト】

文化年間に、比叡山延暦寺の学舎に籍を置いて修行することになったが、留学の費用が無かった。そこで、一旦、近隣の柳崎の観音院に雇われることとし、数年間働いて、手当や謝金を得て、留学の資金を貯めることができた。

【努力の人】

師は、本性として決して英才ではなかった。しかし、ひたすら己に厳しく妥協や懦弱を排し、心を集中して修行や勉強につとめ精を出し続けた。暗い夜は螢の光や雪明かりで照らしながら、苦学して勉強につとめ功績をあげたのである。

加えて、文学においても精進し、その力をつけた。

【学舎での統率者としての役割】

文政年間には、寛永寺貫首からの命を受け、学舎の伴僧たちの学寮の統率者に抜擢された。師は、学僧たちを順序よく巧みに導き、学寮の環境はよいものに保たれた。

そして統率者の任務を終えたところで、師自身の学業も成就した。

【吉祥寺でのはたらき】

師は、寛永寺からの命により、足立郡の吉祥寺に到って、その住持として長い間つとめた。その間、何度も、儀式に先立って朱衣と白帽を賜るといふ榮譽を受けた。

【月山寺への転任と帰郷】

天保年間には、常陸の国の那珂郡の月山寺に転任となったが、何ヶ月もならないうちに、再び吉祥寺へ戻り、そこに留まり続けた、という。

【師の人徳と教化、文学好み】

およそ師が到るところでは、みな、周囲の人びとを仲良くさせ、また周囲のものたちも師の徳風を慕うものが多かった。

師は、仏教修行である熟思考察と読経の合間には、本業の傍ら漢詩の詩作を好み、その作品は世の中に流布した。

【病弱な体】

その一方、いつも病気がちで、時々発作を起こし、薬が常に手放せないという状態だった。

【病状の進展】

ある夏、病状がだんだんと進行し、ついに体中が病で満ちあふれるほどとなってしまった。

【辞世の詩】

自らその死期を悟り、病を冒して衣を払い、がばと身を起こし、弟子たちを顧みて「辞世の詩」を口授した。  
その詩。

山や花といった自然は、今も昔も変わらない姿をしているのだが

溪流の水は、流れては去って行くので、全く新しいものになったかと誤解してしまう

そのように、実は変わらぬ自然というものを感じているうちに、煩惱が消え、金銀を泥沙に捨てさったような、私欲の無い境地に到った

そうなのだ、草樹といった自然こそが、もともとは仏であったのだ

【師の遷化】

七言詩を一章、賦し終えると、仏のいます西方浄土に面を向けて瞑目し、仏の名前を唱えながら、やすらかに遷化された。

師は、時に四十九歳。

実到天保十一年、四月二十九日であった。

ああ、残念でくやまれることよ。

【銘】

銘に言う

人の一生とはどのくらいの時間なのか、

その短時間で無くなることはまるで泡や炎のようだ

こちらに集まり起こったかといえば、

もはやあちらで消え去ってしまう

師は、天性として人びとを世話し救うものがあり、

夢の中でも平穩に人びとを安んじていた

その師は旅だつてしまわれた、いまやどこにおられるのだろうか、

どこにいても詩作に励み、その楽しみを好んでおられるのだろう

師の面影を想起してみれば、

ぼんやりとだが、その姿が立ち現れる

そのお姿は現実と同じでは無いが、全く異なるわけでもなく、私の心の中にある  
だから、師の逝去を悲しみ人世が短いことを嘆く必要は無く、安らぎを得ればよいのだ

#### 【記録】

天保十五年甲辰の歳、十二月吉日

南總芝山の前任持である幻成逸人が文を撰し、且つ書した「龍淵之印」「民如堂」

### 三・資料

(一) 「新編武蔵風土記稿」巻一四三 足立郡之九 木崎領

◎中尾村・寺院

○吉祥寺

「天台宗、川越仙波中院末、寶珠山十林院と號す、開山は慈覺大師中興を法印頼定と云へり、當寺は東叡山學寮の僧住職の寺なり、本尊は地藏の立像にて長一尺二三寸、慈覺大師の作なり、又傍に彌陀の立像を安ず、智證大師の作と云へり、當寺門徒二十ヶ寺、末寺五ヶ寺あり、御朱印五石は村内にて賜へり。」

(二) 「武蔵国郡村誌」巻之九

◎中尾村・仏寺

○吉祥寺

「六十間四方面積二千八百六十三坪村の中央にあり天台宗入間郡川越仙波中院の末派なり天長七年慈覺大師開基す其後衰微せしを以て僧頼定中興す元末寺五ヶ寺門徒二十五ヶ寺あり」

### 四・主な参考資料

#### ① 翻刻

・埼玉県教育委員会『埼玉県教育史金石文集 上』（埼玉県教育委員会、一九六八）

#### ② 訳注

・大島進『尾間木の石ぶみ』（改訂版）（さきたま出版会、二〇〇七）

#### ③ 論文など

・人文学オープンデータ共同利用センター「篆書字体データベース検索」

以上

### 注

(1) 国立公文書館公開「国書データベース」公開の、幻成逸人撰『般若波羅蜜多心經夢性解』（慶元堂、天保四序）「自序」一丁表に、本石碑と同じ篆書体の「克己復禮」の印が捺されている。

(2) 前掲(1)「自序」二丁面に、本石碑と同じ篆書体の「民如堂」の印が捺されている。

二〇二四年一月 薄井俊二訳す